



ちょうど1年前に創立70周年を迎えた大豊建設が100年企業を目指して動き出した。社会インフラを支える企業として磨いてきた技術力をベースに、人材育成と技術伝承で企業価値の向上に取り組む。そのための課題と展望を大隅健一社長に聞いた。

——70周年を機に「新生大豊」をアピールしてきた

「本社をリニューアルし、通常業務ではペーパーレスとフリーアドレスを採用し使い勝手も向上、社員のモチベーションも上がった。PR活動にも力を注いだため、注目度が高まり『建設業界のイメージアップに貢献してくれた』といわれるなど多方面から反響があった。採用増にもつながったので、効果があったと自負している」

——事業環境は

「自然災害が増えており防災・減災の仕事は増える。老朽インフラのリニューアルへの対応も求められる。大豊が受注するには、ニューマチックケーソン工法や泥土加圧シールド工法など強みを発揮できる技術を生かすしかない。今も色あせることなく、工事現場の主流で最先端を走る。これらを軸に事業を展開していく」



インタビューに答える
大隅健一社長

——「技術の大豊」を磨いていく
「新たな技術開発拠点として、新中央機材センター（茨城県阿見町）内に技術研究所を3月に開設した。SDGsやESGを強く意識し、土木技術に加え新しい木質材の活用と構造の研究に取り組み、多様な建築物に展開したい」

——100年に向けては

「人材育成と技術伝承に力を注ぐ。そのためにも働きがいがある会社になりたい。仕事の面白さ、やりがいを早く覚えて大豊の技術を身に付けてほしい。また今後は女性の活躍が大きなポイントになる。工事現場にも出ており、経験を積んでいる。現場所長候補もいるので大切に育てていきたい」

——将来展望は

「5年後には売上高2千億円（平成31年3月期は1500億円）の技術集団を目指す。そのために得意工法を深化させ、ITを活用することも他業種との技術協力も積極的に進める。一方で土木と建築の両部門だけでは先細りが避けられないので第3の柱を模索中だ。必要ならば業務提携やM&A（企業の合併・買収）も視野に入れ、創立100年に向け盤石な基礎を創っていく」